プログラミング概論

第10回　2024年11月27日
App Inventorによる
Androidアプリ開発の実践
(4) 物理シミュレーション1

今回の授業内容

- コンピュータシミュレーションとは
- コンピュータの画面上で「動き」を表現するには
- 等速直線運動
- 的当てゲームを作る

コンピュータシミュレーションとは

# コンピュータシミュレーション

自然や社会に見られる現象をコンピュータ上で模擬的に再現すること　→　分析や予測，ゲームに有用

コンピュータ上で模擬するためには必要なこと
・現象の本質をとらえ，そのしくみを単純化
・ルールや数式により記述

第10回〜第12回の授業では
物理現象のひとつである力学のうちの
「物体の運動」に焦点を当て，コンピュータ上で
模擬する方法の基礎を学ぶ

"動き"のシミュレーション

- 一回あたりの移動量＝速度
- 毎回速度×時間を位置に加えればよい

距離
（道のり）

÷   ÷

速さ × 時間

±

速度 → 位置
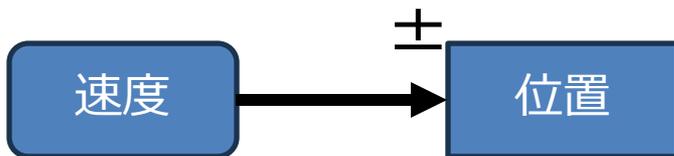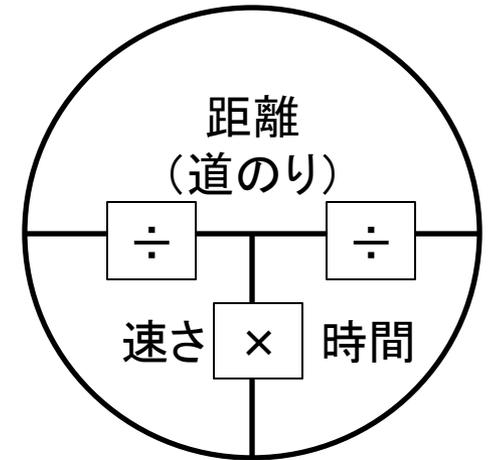
$$x' = x + v_x \times \Delta t$$

（元のxに速度x時間を足したものが次のx）

$$y' = y + v_y \times \Delta t$$

（元のyに速度x時間を足したものが次のy）

コンピュータの画面上で「動き」を表現するには

y

vy (vx, vy)
v
0 vx → x
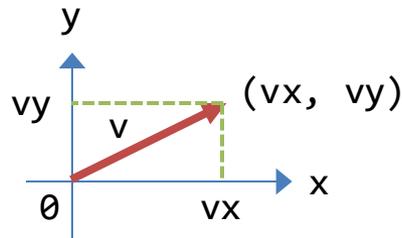
1秒間に動く量

t秒後の位置は？

$$x_{(t)} = x_{(0)} + v_x \times t$$

$$y_{(t)} = y_{(0)} + v_y \times t$$

↓

速度が一定でないとダメ

↓

$$x_{(t+1)} = x_{(t)} + v_{x(t)}$$

$$y_{(t+1)} = y_{(t)} + v_{y(t)}$$

3秒後

2秒後

1秒後

(6, 3)

(4, 2)

(2, 1)
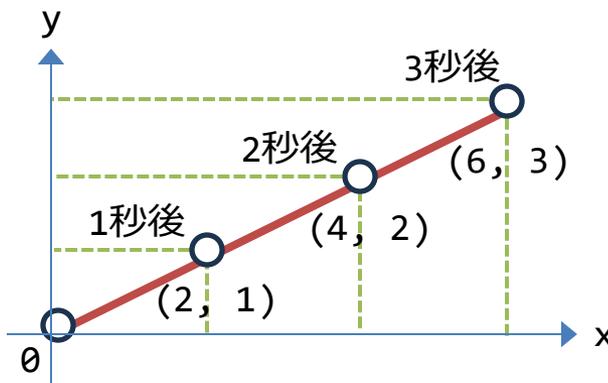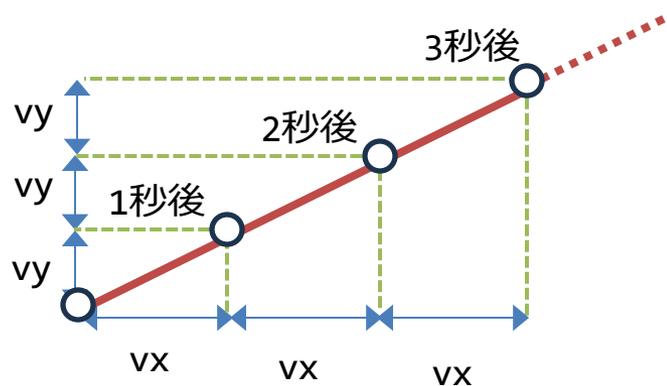
$$x_{(4)} = 0 + 2 \times 4 = 8$$

$$y_{(4)} = 0 + 1 \times 4 = 4$$

いまの時刻tから1秒後の位置を求める.
x(t)とy(t)はいまの位置,
vx(t)とvy(t)は1秒間に動く量を表している.

等速直線運動

表示される値をそれぞれ考えてみよう

，　　，　　，　　，	，　　，　　，　　，	，　　，　　，　　，

vx（移動量）は繰り返しの間，常に一定

↓

等速直線運動

考えたら [Blockly Code](#) で確かめよう

的当てゲームを作る

アプリのタイトルを変える

MIT APP INVENTOR

Projects ▼　Connect ▼　Build ▼　Settings ▼　Help ▼　My Projects　View Trash　Guide　Report an Issue　English ▼　akiyolab5@gmail.com ▼

ai2.appinventor.mit.edu/#4783042956492800

Spinner ⑦
Switch ⑦
TextBox ⑦
TimePicker ⑦
WebViewer ⑦

Layout

Media

Drawing and Animation

Maps

Charts

Data Science

Sensors

Social

Storage

Connectivity

LEGO® MINDSTORMS®

Experimental

Rename　Delete

Media

Upload File ...

CloseScreenAnimation ⑦
Default ▼

HighContrast ⑦
☐

OpenScreenAnimation ⑦
Default ▼

PrimaryColor ⑦
■ Default

PrimaryColorDark ⑦
■ Default

ScreenOrientation ⑦
Unspecified ▼

Scrollable ⑦
☐

ShowListsAsJson ⑦
☑

ShowStatusBar ⑦
☑

Title ⑦
的当てゲーム

TitleVisible ⑦
☑

▼ Application

今回は自由に変更OK ----➤

Privacy Policy and Terms of Use

10

VerticalArrangementを配置する

球をつくる

的をつくる

PaintColor
Red → Red

Radius
25 → 25

Visible ☑

X
270 → 270

Y
270 → 270

Z
1.0

▼ Behavior

Enabled ☑

Heading
0

Interval
100

OriginAtCenter
チェック → ☑

15

ボタンなどを配置するためのレイアウト

リセットボタンをつくる

17

当たった回数/試行回数と座標表示部分

※ Resetと同じレイアウトに入れる

Lable1は0/0
Label2はx
Label3はy
にする

一定の間隔で繰り返す処理をつくる

19

ここまでできたらBlocksへ

アプリ起動時の初期化とリセット処理

(Built-in)
Variables

`initialize global vx to 0`　　Clock1.Timerが1回実行されるごとのX軸方向の移動量

`initialize global vy to 0`　　Clock1.Timerが1回実行されるごとのY軸方向の移動量

(Canvas1)

(Screen1)

```
when Screen1 .Initialize
do  set Canvas1 . Width to Screen1 . Width
    set Canvas1 . Height to Screen1 . Width
    set Ball2 . X to Canvas1 . Width - 50
    set Ball2 . Y to Canvas1 . Width - 50
```

(Screen1)

アプリが起動したら（初期化）
　キャンバスの幅を画面の幅に
　キャンバスの高さも（正方形）

的のx座標は右下から50ずらす
的のy座標も同様に

(Button1)

```
when Button1 .Click
do  set global vx to 0
    set global vy to 0
    set Ball1 . X to 50
    set Ball1 . Y to 50
    set Ball1 . Visible to true
```

リセットボタンが押されたら
　球は動かないようにする
　球のx座標・y座標は初期位置に戻す
　球は見えるようにする

(Ball1)

```
when Ball1 .EdgeReached
edge
do  set Ball1 . Visible to false
```

球が画面端に当たったときには
　見えなくする

※ Canvas1とかついているBlockはそれぞれのcomponentの場所にある

球を飛ばす処理

50ミリ秒に1回行われる処理
　　球を移動する
　　球の座標を画面に表示する

$$x' = x + v_x \times \Delta t$$

$$y' = y + v_y \times \Delta t$$

$(\Delta t = 1 \ と考える)$

クリック
↓
ドラッグ

ドラッグしたとき
　　球の初期位置から現在地まで
　　直線を描く

ドラッグした手を離したとき
　　直線を消す
　　球の移動量を設定する
　　　（手を離した位置が球の位置より
　　　　離れている方が大きな値に）

ここまでできたら動作確認すること

当たった回数と試行回数の表示処理

（元からあるブロックに）
追加

ここまでで再び動作確認すること

衝突したら球が跳ね返るようにする
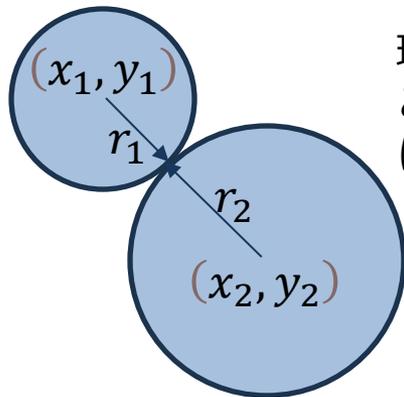
球と的の半径をr_1とr_2とし，中心の座標をそれぞれ(x_1, y_1)と(x_2, y_2)とする。このとき(x_1, y_1)と(x_2, y_2)の距離が$r_1 + r_2$より小さければ重なっていることになり「衝突している状態」と言える。

$$\sqrt{(x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2} \quad < r_1 + r_2$$

衝突処理を追加したら動作確認

実行画面

14:47

的当てゲーム

Reset   11/18 50 50
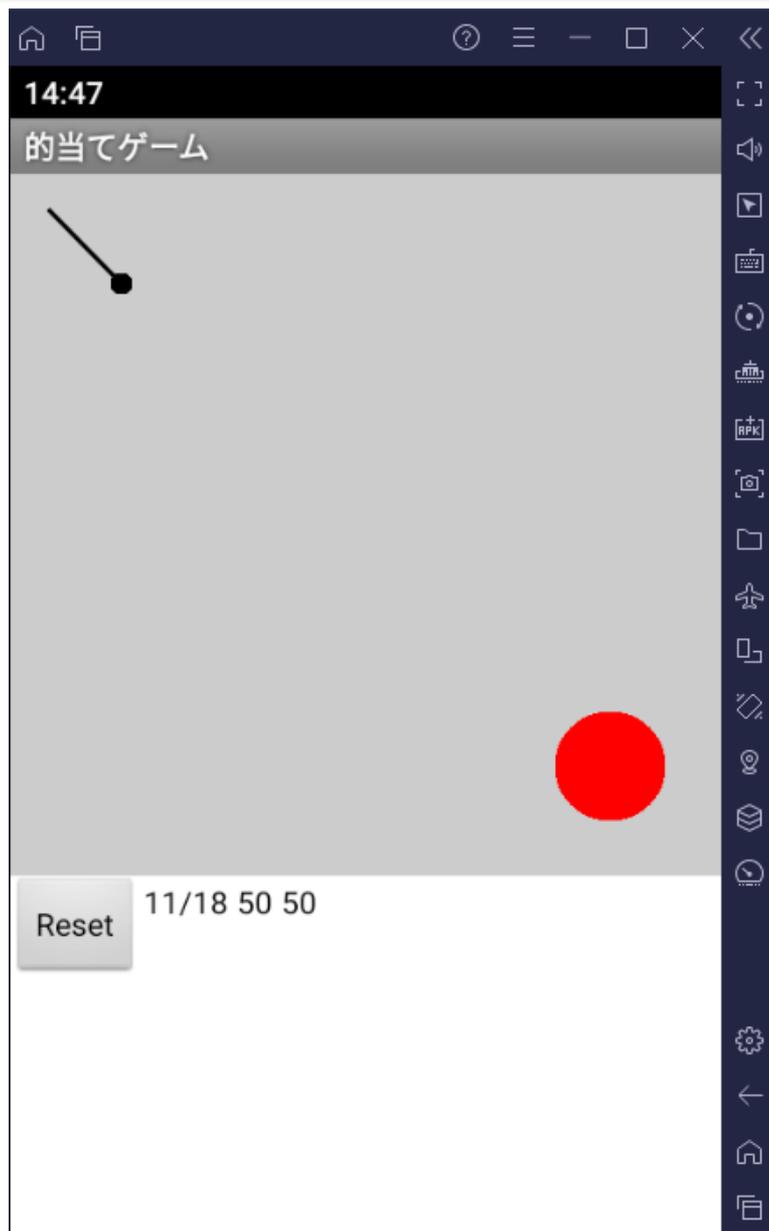
工夫してみよう

- Resetするたびに的のx座標が変わるようにしてみよう
- Resetするたびに的の大きさが変わるようにしてみよう
- 的が常に移動するようにしてみよう